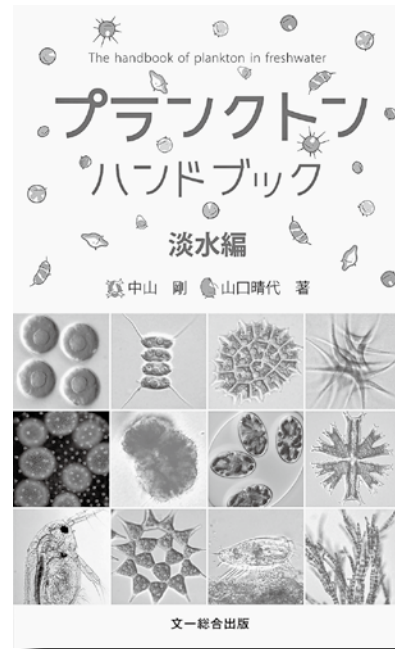


中山剛・山口晴代 著

## プランクトンハンドブック 淡水編

大学の植物分類学実習で「淡水藻類の観察」がテーマのとき、私が最初の説明で強調することがある。それは「淡水環境の生物はととても多様で、たった一滴の水の中に真核生物の全てのスーパーグループ（大系統）のメンバーを観察できることもある」と言う事と、「微細藻類はなかなか美しいきものであるのでは非その形の多様さを堪能してほしい」の二点である。実際、池にもよるが最初の文言はあながち大袈裟でもない。池の水を一滴採って顕微鏡で観察するとまるで万華鏡を覗いたような、華やかで色とりどりの様々な形の生物の姿を目の当たりにする。それらの名前や何の仲間かを知りたいと思った時に植物プランクトンから動物プランクトンまでカバーするハンディーなガイドがあれば申し分ない。そのような要望に応えるのが本書「プランクトンハンドブック 淡水編」である。

本書は新書版サイズで小型の本であるが、内容を見てみれば随所に工夫の盛りこまれた良く作り込まれたハンドブックであることがわかる。本書の最初の部分はイラスト検索図となっている。この本で紹介したプランクトンを大きさや目立つ特徴で区別したイラスト・写真のページである。まずは「体のつくり（単細胞か群体か糸状体かなど）」「細胞の運動（鞭毛の付き方、仮足、繊毛など）」「細胞外被（粘液質、トゲや模様の有無など）」「葉緑体の色や形、数」などに関してそれぞれの例を示して解説している。つまり読者はプランクトンのどの部分に目をつけて観察すれば良いのかを学ぶことができる。そして本書の最大の特徴は12ページから19ページまでの絵合わせのためのイラストページである。大きさや運動性、体制別に本書で扱っている全ての属の典型的な形態がカラーで描かれている。自分で観察した種類と似たものをこの中から探し出し、それぞれの図に添えてあるページ番号に跳べば、その生物の写真と解説に行き着くという仕組みである。これらのイラストはシンプルながら各属の特徴を良く捉えている。なお、このガイドは基本的には「属」の紹介であって、属内の種の多様性を扱っている訳ではないのでご注意を。20ページ以降は本書のメインパートであり、それぞれの属の解説部分となる。各属について1～数枚の写真を用いて特徴の解説を行なっている。特筆すべきはすべての顕微鏡写真が高品質であるという点で、この点も本書の特色の一つと言って良い。微細藻類の美しさを十分に示してくれている。最初（27ページまで）が原核生物で主にラン藻類の各属が紹介される。28ページ以降が真核生物のプランクトンの解説であるが、本書の特徴として、スーパーグループ（本書では「大系統群」と呼んでいる）のシステムに基づいた分類系を採用している点がある。すなわち、アーケプラスチダ、アルベオラータ、ストラメノパイル、リザリア、エクスカバータ、アメーバ動物、オピストコンタの7つのスーパーグループに属するプランクトンをグループ毎に紹介している。従っ



株式会社文一総合出版  
 新書版 144 ページ（オールカラー）  
 2018年10月9日  
 定価：本体1,800円＋消費税  
 ISBN：978-4-8299-8154-2

て本書ではプランクトンを植物・動物に二分して掲載するのではなく、同じスーパーグループならば植物プランクトンと動物プランクトンを一緒に登場させるという配置になっており、生物進化を反映させた構成となっている。さらにユニークな試みとしてそれぞれの属について★印の数でレア度を表現しており、★1つが頻出種で、★★★★がレア種となっている。レア度の傾向は筆者のいる北海道でもほぼ同じ感じである。この工夫も読者の「レアものを見つけたい」というチャレンジ精神に火をつけることだろう。「広がる光合成能」や「ミドリムシの変形運動」など興味深い話題を提供するコラムも14個用意されている。巻末には、簡単ではあるが淡水プランクトンの採集法、観察法、培養法、文献・関連サイトなどの情報が掲載されている。本書をより親しみやすく、見た目も楽しい図鑑としているのが、随所に出現する愛すべき藻類の「ゆるキャラ？」達である。藻類に目、口、手足などをつけたキャラクター達のイラストであるが、それぞれは藻類の特徴をしっかりと捉えており、知っている人が見れば属まで特定できるという優れものである。

新しい試み満載の本書は、淡水の動・植物プランクトン同定の入門書として最適で、教育現場はもとより、個人で顕微鏡観察を楽しもうという方にもお勧めである。

（北海道大学・院・理学研究院 堀口建雄）